

【書評】

高橋源一郎著『恋する原発』を読んで

(講談社, 2011年11月)

大 木 昌

のっけから弁解じみてるんだけど、正直言って、こういう原稿の依頼って、すごく迷惑なんだよなー、っていうのが正直な気持。東南アジア史の専門書なら私の守備範囲、なんとか書評の形にもっていけるのに。これは小説といって良いのか、エッセイ付きの小説と考えるべきなのか、はたまた、筋があってないような、まったく新しい形の小説なのか、判然としません。そんな風に、伝統的な概念にとらわれて作品を分類すること自体、ダメーだよ、意味ねーだよ（本書の高橋調が乗り移ってしまいましたが、もうこのままいかせてもらいます）っていう著者の声が聞こえてきます。著者自身は本の帯で「いままでいちばん書きたかった小説でした」と言ってるんだから、誰がなんと言おうと、もう間違いなく、これは純粋・正統な「小説」です！ここの所、大事ですからしっかり押さえておかなくちゃ、いけません。

本書については偉い評論家センセイたちが、すでにたくさんの書評を書いているでしょうから、私はここで、「書評」を書くつもりはありません。ていうか、書けません。ましてガクジュツ論文調の文体では無理です。また、現在、この本が日本の文壇というギョーカイの中でどんな評価を受けているのかわかりませんし、関心もありません。風評によれば、なかなか評判が良く、しかも売れてもいるようです。だから、この本には私の「読み」なんか及ばない深い意味が込められているにちがいありません。「文学というものは、このような『読み』によって成り立っている。そうでなければ文学のことばになんの意味もない」(p.211)という文章に思わずドキリとしてしまいました。ここで

うっかり私の「読み」を書いてしまうと、私の文学的素養の無さがバレてしまいますが、“そんなの関係ねえ”，というスタンスで、書評というより「感想文」を書くことにします。

まず、本のタイトル。結構こだわるんだよねー、私は。「恋する原発」いいですねー。特に「恋する」ってところが、純情可憐な乙女を想像させ、ぐっと惹きつけられます。うっかりすると、タイトルを見ただけで本を買って読みたくなってしまいます。が、次に「ん？乙女と原発？何じゃそれ？」という疑問が起きます。乙女が原発に恋をするのか、原発が何かに恋をするのか(そんなバカな)、はたまた、逆説の皮肉をこめて、私たちが原発に寄せている思いなのか、脳ミソがウニになるまで考えても分かりません。これは、誰が(何が)誰を(何を)という、主語と述語をはぶくことで読者の想像力をかき立てるための常套手段ではありません。小説のタイトルは意味内容より衝撃力と語感がいのちです。

「恋する原発」というタイトルを聞いて咄嗟に、これは出版社の担当者が営業的な配慮から「これなら時節柄、絶対売れますよ」と著者に押し付けたにちがいない、と思いましたが、読んでみて、実は著者の深謀遠慮と信念があって付けたタイトルであることが判明しました。真相がどうであれ、「恋する原発」というタイトルは、近年希にみる魅惑的なキャッチコピーです。さすが、高橋源一郎！思わずうなづいてしまいました。今や「原発」という言葉は水戸黄門の印籠となり、「この印籠が目に入らぬか」となり、私たちはわけもなく「悪うございました。お許しくださいお代官様」と言っ

て土下座しないといけない呪文となっているのです。それでも「それって、どんな意味？」なんて詮索する奴は、問題意識ゼロ、知能程度ひく〜い奴、「そんな風に、いちいち理屈をこねたり意味を詮索するから、あんたには小説を味わう資格なんてないのっ！」って言われてしまいそうです。

いよいよ中身です。これはAV（アダルト・ビデオ）。正しい日本語ではビデオですねの制作現場で、どんなAVなら売れるか、男を勃たせることができるかを、制作関係者一同が大まじめに議論・奮闘する「愛と冒険と魂の物語」（本の帯の文言）です。一昔前なら、たちまち風俗攪乱・猥褻物陳列罪でお縄にされ、「市中引き回しの上、獄門張り付け」（古っ！）となってしまう、決して人の目には触れてはならない「おま x x」、「ちん x x」、「ヴァギナ」、「ペニス」などの放送禁止用語が充満しています（いやしくも格調高くあるべき大学の『紀要』でこんな卑猥な言葉を使っているのかな。でもこれみんな著者の言葉だからね。念のため）。清純な「恋する」イメージと社会派路線のタイトルと、中身の濃密な猥雑の組み合わせ、合わせ技一本！ さすが、高橋先生（実際、大学の先生でもある）です。

これって、村上龍の『限りなく透明に近いブルー』（1976年）の手法とちょっと似てない？ あの小説、最初に付けたタイトルは「クリトリスにバター」だったんだって。そして中身はセックスと乱交パーティーと麻薬などどイケナイ話なんだよね。しかし、最初のタイトルはあまりにも猥褻すぎるといっているので、「限りなく透明に近いブルー」という、真逆の清らかなタイトルにすっかりイメチェンしたんだ。さすが、村上センセイ。

AVの制作現場では、現在生きている人間だけでなく、死者も未来の人間も登場し、時空を超越したシュールな内容が語られます。AVの制作は、モテない、セックスの相手がいない、それでもセックスしたい哀れな男たち（本当は女たちだっているのに）を癒すという、とても慈愛に満ちた作業であることが分かります。野坂昭如の『エロ事師たち』（1970年）を思い出させます。こちらはエロ映画を作る、哀しくも優しい「昭和のゴト師」た

ちの話です。当時私も、ドキドキしながら読みました。一方、『恋する原発』は、ゼニとカネと卑猥と愛と哲学と文学論が渾然一体となった「平成のゴト師」たちの物語です。

白状してしまうと、文学の修行が足りない私は、著者がいったい何を言いたいのか良く理解できませんでした。ただ、本書が放つ逆説的效果には感心しました。つまり、セックスと性器にまつわる言葉が氾濫しているのに、全体としてはエロスをまったく感じさせないのです。それもそのはず、「おま x x」と「ちん x x」を500回も1000回も読まされたら、確実に食傷気味となり、性的興奮は雲散霧消してしまいます。とどめは、小学1年の女の子に年配の女性が、襲われそうになったら『**『やってもいいけど、お金払って！』**って』（太字は原文のママ）叫ぶんだよ、と諭すくだりです（p.151）。「同情するなら金をくれ」という、あの有名なセリフを思い出します。ここは、性の商品化に対する批判なのでしょう。いや、それではあまりにも陳腐すぎます。むしろ、放送禁止用語を連発することで、それらの毒を薄めてしまい、セックスを、干からびて砂を噛むような不毛な行為にしてしまうこと、「性の砂漠化」が著者の奥深い狙いなのかも知れません。そうだとすると賛否は別として、これは著者の一つの主張としての意義は十分あると思います。ただし、最後には、愛に満ちた集団セックスで大団円となるので、私の説はつじつまが合いません。

かつて瀬戸内寂聴が、渡辺淳一の、セックスのために身を滅ぼす男女の“不倫小説”にたいする世間の冷たい目にたいして、性が命をかけるに値する、根源的な問題だということを、私たちは忘れていたが、渡辺淳一氏はその大切さを思い出させてくれる、という趣旨の文を書いていました。私は、近代という世界が、首から上の頭（観念）を重視するあまり、首から下の身体性（食べることやセックスすること）を軽視していることに、ある種の危機感をもっているのです。性を前面に出す高橋氏の姿勢に賛成です。

ところで私はこの小説を、頭からしっぽの先までセックスというあんこが詰まった鯛焼だと思っ

て、いい気になって食べていたところ、しっぽの手前辺りで突然、ガリッと、何やら石のような堅いものを噛んだようなショックを受けました。取り出してみると、高尚かつ教養の香り高い「震災文学論」。これって、どうしてもこの小説の中に入れてはならなかったのでしょうか？ 私としては、文学論は別の場所でしっかりと書き、ここではしっぽの先まで「官能小説家 高橋源一郎」で通して欲しかった。最後にもう一つ、この小説から、原発とフクシマの語を全て取り除いても、全体の物語は変わらないような気がしました。「原発」を前面に出す効果は十分にあると思いますが、その必然性が私には最後まで理解できませんでした。「いままででいちばん書きたかった小説」なのに、私の「読み」が浅くて真価を十分に評価できませんでした。すみません、高橋先生。